

第16号 20円
昭和44年 3月25日

内容

機械と人間	1
松下館落成	2
後援会任務完了	3
第20回大会	5
第16回大会	6
誠実校務	7
施設充實	8
利用状況	9

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

《所在地》

東京都八王子市下柚木
電話 0426-76-8511-2

《東京事務所》

東京都中央区日本橋本町3の3
三井銀行本町支店ビル5階
電話 東京(270)4431
振替口座 東京74590番

編集・発行人 飯田宗一郎

製作 中央公論事業出版

「機械と人間」を論ずる前に、「機械」と「人間」が「と」という言葉でつながれたとき、われわれは何を考えるか、ということ先ず問題にしたい。男と女、大学と学生というふうには悲観的に使っているが、この使い方には悲観型と楽観型の二通りがある。悲観型で「と」を使ってみると、機械と人間は敵であり、「今日もあそこで子供が自動車にひかれたではないか」という考え方になる。一方楽観型で見ると、機械と人間は友だちであり、「自動車があるが故に楽しいドライブをして、親孝行も出来た」ということになる。悲観型の態度をとると、必ずしもよい程出る議論は、「電子計算機を考えたのは人間だから、人間の方が素晴らしい」という論理である。しかし、これは「自分の子が良く出来るのは私が生んだのだから」、「その私を生んだのは母だから」といういわば進化論の逆行になってしまふ。どうしてこうなるかといえば、それは簡単に価値論をやってしまうからである。計算機と同じ次元で人間を並べ、評価することに問題がある。そこで両者を、楽観も悲観も許さない関係でとらえると、人間と機械が一緒になって構成している社会、どちらも一つの構成要素になって形成する大きなシステム—Man-machine system(以下MMSという)として見る。このMMSの結合度は非常に濃いものであって、機

械が一度罷業すると、とても現代生活は維持できない。このような関係に序々になっていく過程が、一種の技術史である。私が数年来、機械と人間について考えて来たことは、技術の歴史の中から抽出してきたものである。数ある技術史を様々な見方で、何度も見直してみることが必要である。これは歴史全般にいえることである。例えば、情報に関する考え方というのは、以前は余りなかった。従って西洋史なり日本史を情報の観点から見返していくと面白い。ジン

機械と人間

—松下館落成記念講演—



早稲田大学教授 高木 純一

ギスカンは隣国を次々と征服し大國を築いたが、またたく間に瓦解した。これは戦争は一時の努力で成し得るが、政治は継続するということを示している。政治とはコミュニケーションである。コミュニケーションのつかない大國を持つていても成立しなかつた。つまり國が成立するときの条件であつたのである。しかし、それが今や破れて来た。電波という無法者が、國境を意識せずにどんどん侵入し、更に宇宙にまで及んでいるという状態である。この情報革命

まで序々に到達して来たわけだが、歴史の時点、時点でそれぞれ革命が興っている。段階に分けて考えると、第一は時計時代で、時計を造る職人が描いた理想は、あらゆる精密なからくりを持つ自動人形であつた。この時代には機械の中に擬人的要素が入っており、機械自身が人間ほどの完璧さを持つてということ願っていた。やがてこの考えを捨て、第一次産業革命にみる筋肉だけの、あるいは足だけの、決して全人的でない部分の機能だけを抽出した機械が出て

くる。これがあくまで巨大になり一つのアンバランスを形成した。このときたちまち人間社会にまづいことがおこる。よくいわれる例であるが、汽車が走つたということ、今までのような労働を要しないとということ非常に便利になつたが、仮に殺人事件の犯人が逃走に汽車を利用すると、一番速いのが汽車であつたから捕える方法がない。電信の発明を待つて解決が出来た。また交通マヒを解決するために地下鉄を掘つたが、そこを走つたのは蒸気機関車であつ

た。そこで無煙炭の研究がおこるが、間もなく電車が發明された。このように歴史はことごとく試行錯誤の歴史である。

ところで、MMSの中のルールをどうやって発見するかという問題であるが、これは総合的であるが故に非常に難しい。一部だけの良い悪いではなく連立方程式のように沢山の条件が立ち、その中から最適条件を発見するということであるから、一人の頭脳ではとても出来ない。われわれがせいぜい頭の中で見事にやつのけるのは、古代における餌をあさつて生活である。そこでどうしても計算機の力が必要になってくるのである。

現代のあらゆるものが、実はMMSにそつて動いている。みなさんはすでに子供の時からMMSの教育を受けたから、本当の人間にはかえれない。MMSとしての人間になつてはいる。しかしこれを悲しむ必要はないのであって、新しい芸術なり新しい調和を発見すべきである。様々な分野の人が、それぞれの立場でMMSの未来像を追求することによって解答が出てくると思う。例えば法律の立場で考えるなら、法律は秩序であるがMan丈の秩序ではない。machineも入っている巨大な共同体の問題として取り組まなければ、小さな問題も解決することはないということである。最後につけ加えたいことである。(以下四頁下段に続く)



真理の鐘を鳴らして 松下館の落成を祝う

昭和43年12月7日

第二回募金による施設拡充計画の一つである教師館は松下電器産業株式会社の寄付によって実現した。本法人評議員会はこの教師館を松下館と命名し、永く感謝することを決議した。教師専用の宿舍が要望されていたのと数名のゼミナールのための小ゼミナール室が必要であったのを考えて、この松下館は二つの要求を同時に解決することにした。個室九室、ゼミナール室二室、それに共用のサロンがつき管理人室、浴室、洗面所が設備されて、構内最高の場所に建てられた。サロンはその中心であるが各室から富士を眺望することができ、小鳥の音が朝の目覚めをうながしてくれる。

中庭には清水建設株式会社のお祝いとして寄贈された樹齢百年のけやきが一株より一本でている見事な大株がうわり、約一〇〇本の富士桜が椿の間に挿えられ、五個の石臼の大石が点景を添えている。

建物と中庭をして周囲の風景は見事に調和し、そしてここに来りて泊り学問にうちこむ先生方の姿と先生方を訪れる学生諸君との対話は、セミナー・ハウスの雰囲気を高めることであろう。

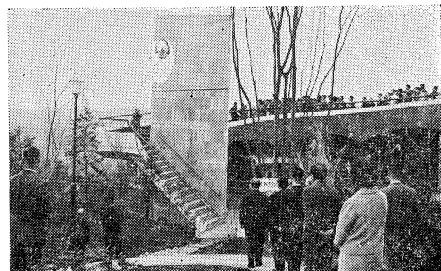
ベルタワーの献鐘式

「真理の鐘」多摩の山々にひびく

落成式に先立って午後一時より建物の自由参観とし続々とおいでになるお客さまは、屋上からの展望を楽しんでおられた。前後は、



佐藤会長と女子学生



讃えよ、真理の鐘—献鐘式風景

かんばしい天候でなかったが、幸いその間にはさまた本日は、まずまずの天候に恵まれ、趣向をこらした献鐘式は大成功であった。この建物には念願の鐘をつけることとし、高さ一・二米のコンクリート平板でベルタワーをつくり、そこに底面で直径四〇厘米の銅製の鐘をさげた。高岡銅器として古来名鐘の産地である鋳物師に注文して作ったものである。

この鐘を真理の鐘と名づけ、佐藤喜一郎氏の筆になる真理の二字が鑄込まれている。学問の丘ゼミナール・ハウスにまたとないすば



真理の鐘銘

らしい名所ができたわけである。多くの若い学生たちが、この真理の鐘を背景にして写真をとることであろう。

午後一時二十分つき台の上に佐藤喜一郎氏が二人の女子学生とならび立ち、綱を交互に引くと高い鐘の音が付近の丘陵に流れていった。中庭には茅館長夫妻、森戸辰男先生、植村経団連会長等多数のお客さまが、そして屋上には百数十名の男女学生がならび、下と上から鐘が鳴ると共に、歓呼の声と喜びの拍手が相和した。お客さまは階段よりベルタワーにそって屋上にあがり、「喜びの歌」の学生の大合唱の中を歩まれつつ、式場の講堂へ向われた。「うまい趣向だったネ」という感想が来会者の中の会話からきかれた。

落成式次第

〈司会〉ICU助教

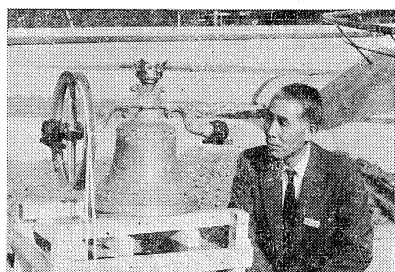
挨拶と式辞 小塩 節
館長 茅 誠司
報告と感謝

理事長 増田 四郎
ヴァイオリン演奏 学生 松井 直樹
学生 松井 直樹

「イザイエのソナタ三番」
祝辞

中央教育審議会 森戸 辰男
経団連会長 植村甲午郎
東京工科大学長 斯波 忠夫
都立大学教授 関 嘉彦
立教大学教授 久保田キヌ子
閉会挨拶
専務理事 飯田宗一郎

式は約二〇〇人を超える盛況。小塩ICU助教の名司会で進行し、正面右側に本法人側の佐藤、茅、大浜、増田の諸先生、左側に森戸、植村、斯波の来賓の諸先生。茅館長の歓迎の挨拶と松下館落成にいたるまでの大学セミナー・ハウス四年間の発展振り、一〇年前の思い出などを込めたお礼の経過報告と第一回、第二回にわたる募金運動の成果を報告され、



千人会より寄贈された真理の鐘と飯田専務理事

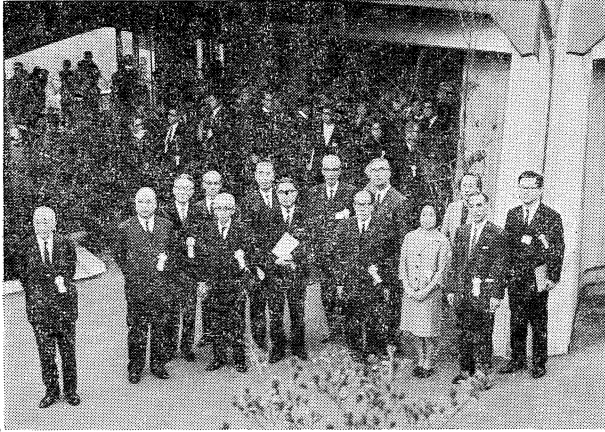
ここに創立当初の計画と第二期の拡充計画の完成したことを感謝をもって報告された。そして目的を立派に完了した建設後援会は、本日をもって解散することとし、五年間の基金運動の中心的存在であった後援会長佐藤喜一郎氏に「真理の鐘」のミニアチエア第一号を増田理事長から佐藤会長に贈呈され、全会衆が感謝の拍手をおくった。

感謝状は松下電器東京研究所長

大学セミナー・ハウス建設後援会任 務完了

目標達成して、ここに 栄えある解散

落成を喜ぶ来賓と主催者 左より植村・茅野、
増田、佐原、佐藤、飯田、小池、山内、大
浜、孝、同夫人、久保田、斯波、小塩



そのご報告と感謝 のご挨拶

が証明され、開館二年にして早くも拡充計画の必要が生じるまでに発展しました。

大学セミナー・ハウス建設後援会は、昭和三十七年九月一九日東京大学懐徳館において創立総会と、発会祝賀パーティーを行なって、募金活動の第一歩に入りました。

二、拡充資金一億五千万円募金
昭和四二年五月～四三年五月

国公立大学の交流を図りつつ、大学の高い理念に生き、しかも現実在即した新しい人格形成の構想は、当時の社会では必ずしも容易に理解されなかったけれども、各層のご協力によって募金運動も進展し、所要の資金を集めることができました。

一、建設資金三億円募金
昭和三十七年六月～四〇年五月

法人および個人寄付
一五〇、四五〇、〇〇〇円
日本自転車振興会補助金
一二、五〇〇、〇〇〇円
同 二、五一〇、〇〇〇円

同 一六五、四六〇、〇〇〇円

由が明かになったので、第二回の募金運動は一年にして目標を達成しました。昭和四二年七月には、講堂と図書館が、そして同四三年六月にはテニスコートが、さらに同四三年一二月には教師館―松下館が落成し、拡充計画は見事に完成しました。

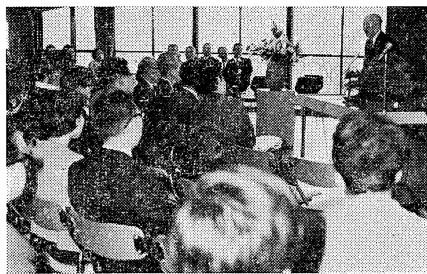
計 一六五、四六〇、〇〇〇円
大学セミナー・ハウスの存在理由が明かになったので、第二回の募金運動は一年にして目標を達成しました。昭和四二年七月には、講堂と図書館が、そして同四三年六月にはテニスコートが、さらに同四三年一二月には教師館―松下館が落成し、拡充計画は見事に完成しました。

計 二九〇、〇七三、八五一円
昭和四〇年七月に開館し、いよいよ教育活動を開始されるにおよび、大衆化した大学の中で、教授と学生の個人的接触を可能にする

思えば昭和三十七年六月より同四三年五月まで満六年各位には常任委員として、または委員として募金運動をご支援下さいました。大学セミナー・ハウスの構想は立派

人的接触を可能にする
建設後援会の任務は完全に終了

は実を結び、二〇〇人収容の施設をもつては狭隘をつける程の盛況を呈し、真に大学らしい大学の教育活動を行ないつつ大いなる成果をあげております。このことをご報告できることは大きな感謝であります。



募金達成と建築完成を祝う植村経団連会長

いたしましたので、松下館の落成式において多年にわたる建設後援会の御苦勞と御功績を公表し、来賓、教授、学生一同は心から人間の善意に深甚な敬意を表しました。

小池勇二郎氏が松下幸之助会長の代理として受取られ、設計者吉阪隆正氏の代理として松崎義徳氏が施工者清水建設株式会社は菊池八郎取締役が受理された。

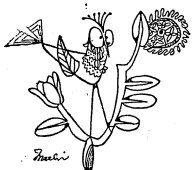
その後一寸会場空気を回転させるため、桐朋学園の松井君のヴァイオリンの演奏に耳を傾け、来賓の祝辞をうけた。それぞれみなセミナー・ハウスの最大の理解者、後援者または利用者であられるので、心のこもったお言葉であった。日本の大学教育の現状から見た感想、財界の代表として希望が述べられ、国・公・私立の学長、教授たちは利用者として愛用者としての代表的お祝いをのべ、この教師用宿舎の意味を高く評価された。

飯田専務理事は終始感動の表情で、お礼をのべられ、理想が現実化する中に身を投じている者の心境と決意をのべられた。

全来会者の合唱で式を閉じお祝いパーティーの本館大食堂へ順次向われたが、主なる来賓と本法人主催者が講堂前で記念写真をとられた。

昭和四三年一月二十七日

- 茅 誠司
- 館長 増田 四郎
- 理事長 大浜 信泉
- 前理事長 佐藤喜一郎
- 代表常任委員



お祝いパーティー

簡素な和洋のご馳走がテーブルならび、奉仕グループが昨日より飾りつけられた清らかな会場に、立錫の余地なく学生も先生と同席し、中央のメインテーブルに主賓を迎え、セミナー・ハウスの一人の柱、大浜信泉前理事長の乾杯の挨拶によって、祝宴に入った。途中松下電器の小池所長のテーブルスピーチなどがあり、あの顔この顔がみんなこの五年間のセミナー・ハウスで結ばれた人々である。この丘、それは大学を思う人々の出会う不思議な丘である。山内恭彦先生を中心にしたテーブルが殊の外ビールの飲み振りが上々であったらしい。楽しいパーティーも午後四時閉会。



にぎやかなお祝いパーティー (本館食堂)

落成式記念講演会

午後四・〇〇～五・〇〇

〈挨拶〉
企画委員会顧問 山内 恭彦
〈講演〉
松下電器技術本部東京事務所長 茅野 健



記念講演の茅野健氏

機械と人間
早稲田大学教授 高木 純一
この講演は落成を記念して一般に公開された講演であったが、同時に一月六・七・八日に当館で開催されていた第二〇回大学共同セミナー「コンピュータ時代の人間」に関連する講演でもあった。興味深い講演であった。

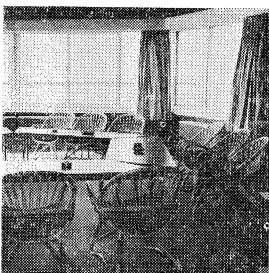
祝辞に拾う

〈その一〉



東京工業大学 学長
斯波 忠夫

現在の学生問題の最大の原因は、学生数が無雑作に多くなつて



松下館のサロンの内部
窓から真正面に富士が見える

きたため、大学が本来の使命を十分に果たすことができなくなったというところにあるかと思えます。また理科系の大学では、最近の科学技術の進歩発展に眩惑されて、人間形成という面での大学の寄与というものが遅れてしまったということもあります。

この頃の学生がいろいろと社会に迷惑をかけたか、大学が正常の姿ではあり得ないということがおこっておりますが、その一番の原因は、そうした学生を個々にみていくと、孤独感から絶望感へ、更に乱暴へと走るといふ過程をとっているものが少なからずあるように思えます。このような孤独感を解消するためには、先生方と学生が膝を交えて話し合う交流の場が是非とも欲しいのです。セミナー・ハウスを私共が利用させていただいております理由は、まさにその点でございます。利用の効果について調べてみました結果、学生たちがこの後、先生たちに非常に親しみを持つということを、参加した先生方が異口同音にいつておられたところでもあります。

〈その二〉



立教大学教授
久保田きぬ子

ここに学生諸君と一緒にまいりますと、学生の方は非常に生き生きとしてくるのでございますが、それに反比例して教師はしょぼたれてくる。と申しますのは、お若い方のお相手をしておりまして、私のような年寄りは疲れ切つてしまつてございます。その教師の疲労を回復してやろうという思いやりから、教師専用の部屋を頂戴できたことは、私にとってこんなにうれしいことはないであります。

ここには新鮮な空気と樹と静寂がある。そして若い世代が育つには、これらが何より必要ではないだろうかと思つてございます。大学に關係している者として、この頃の大学の騒動を見ていると、私は本当にやめたいと思つてます。それ程に思いつめる時もあるのでございますが、その反面にこういう静かな環境を財界、特にこの度は松下さんのご好意で頂戴するということになる、もう一度勇気を奮い起ししていただけることをやってみようと思つてます。そしてこの新しい建物を感じていただき、学生諸君だけではなく、私の心のハイマートにさせていただきたいと思つてます。

(一頁より続く)

ことは、人間は本来、ゲームを好むという本能を持っている。これはかつて原野において他の動物と競争した名残りであるかもしれないが、そこにはまた、敵に勝つことによる喜びを持っている。そのゲーム精神が、例えば企業の本質にもつながっていく。資本主義におけるゲームは、必ずしも同一条件のもとには行なわれない。計算機を持つている会社もあれば、ない会社もあり、そのゲームに関するルールは極めて弱い。しかし人間からことごとく競争心を奪ってしまうとどのような結果になるかといえば、案外暗い何ものかになるおそれがある。楽しい限りにおいてはゲームをすべきである。そのためにはある程度の制約はやむを得ない。この制約はMMSであるが故に必要である。bodyとbodyのゲームならざしたことはないが、今や原爆をもち、あらゆる機械をもつシステムの中におけるゲームは、かなり残酷で非情なものがあるわけである。だからMMSのルールとしては、ゲーム性をかなり圧縮していかなければならない訳で、自然現象の如く人間社会の現象を扱ってはならない。これはあくまで理想をもつて進むべきであるが、前にも述べたように、いろいろの立場の人が話し合つてこそ、初めて解答が出てくるものではないだろうか。

(落成記念講演概要、文責編集者)

第二十回大学共同セミナー

昭和43年12月6・7・8日

■主題 コンピュータ時代の人間

——職業の変化と人間観の変化——

〈主題講演〉

東京大学名誉教授 山内恭彦氏

〈全体講義〉

電子計算機の可能性

東京大学教授 高橋秀俊氏

社会学と職業の変化

東京工業大学教授 林雄二郎氏

人間観の変遷

東京工業大学助教授吉田夏彦氏

〈合同講義とセクション指導〉

A 社会科学部門(一日目)

東京大学助教授 木村尚三郎氏

一橋大学助教授 宮川 公男氏

東京工業大学助教授山田圭一氏

東京工業大学助教授 原芳男氏

B 電子計算機部門(二日目)

東京大学教授 渡辺 茂氏

東京大学教授 南雲 仁一氏

上智大学教授 デイターズ氏

東京大学助教授 後藤 英一氏

C 人文部門(三日目)

慶応義塾大学教授 印東太郎氏

東京大学助教授 山本 信氏

駒沢大学講師 坂本 百大氏

東京工業大学助教授吉田夏彦氏

東京工業大学助教授山貞登氏

〈ゲスト〉

早稲田大学教授 高木 純一氏

〈参加学生〉

一二八名(うち女子三九名)

東工大(二二)、早大(一一五)、慶

大(一一〇)、津田塾大(九)、東大

(八)、一橋大(七)、学芸大(六)

横浜国大(五)、都立大(五)、日

本女大(五)、東京女大(五)、中

大(三)、電通大(二)、青山学院

大(二)、東京医科歯科大、共立

大、法大、日大、武工大、神奈川

大、群馬大、聖心女大、学習院

大、玉川大、国立薬大、多摩美

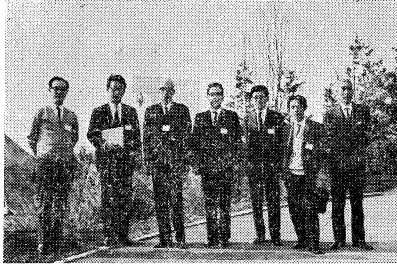
大、図書館短大各一名。OB(四)

〈企業推薦〉

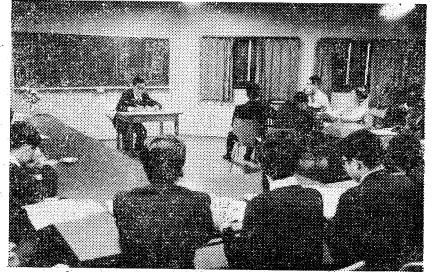
東京電力、富士銀行、三菱重工

業、三井銀行、日立製作所、富士

製鉄各一名。



指導の先生方: 左から印東, 山本, 山内, 坂本, 吉田, 橋山, 飯田



後藤英一先生のセクション演習

◆主題の主旨◆

現代という、きわめて変化のはい時代を端的に象徴しているものとしてコンピュータの装置面および利用面の急速な進歩をあげることができ。

この「巨大な人工頭脳」の出現以来、人間の優越感や劣等感にもとづいた、さまざまな発言がにぎやかに交換された。しかし、そのような「哲学的」な議論の時期はようやく過ぎて、コンピュータをわれわれの社会にしっかりと根をおろし、これからの文化の発展に、よかれあしかれ、大きな影響をおよぼしつつける存在、とみとめなくてはならない時期になったようである。

このような状況を念頭において、このセミナーは企画された。すなわち、コンピュータをそのすぐれた象徴の一つとする、科学技

術の、社会体制への大きな影響を前にして、われわれの人間観、職業観がどのように変っていかなくてはならないかを論じあうのが、このセミナーの目的である。もちろん、この問題への解答の一つとして、「人間観は変る必要はない。古来変らない人間性を中心に、これからの社会の設計を考えるべきだ」という発言も可能であるし、また、人間性そのものの変化をなかなば宿命的に受け入れた上で話をしようとする未来学的発言も可能であろう。つまり、コンピュータ論議を一つ一つの重要なきっかけとして、各人の人間観、職業観をたしかめあうことが出来れば、セミナーの目的は果されるのである。

第二十回セミナーに参加して

単科大学生の立場から

藤井 頌子

この世はまさにコンピュータという時代に生き、なおかつコンピュータに大に関係ある数学科にいながら、人間の人間くささに執着し、コンピュータ関係の仕事をさげ、教職につこうとしていた私は、多分にコンピュータというものに偏見をもってこのセミナーに参加した。セミナーではこのセミナーを計画して下さった

山内恭彦先生、「コンピュータが三度の飯よりも好き」という実際にコンピュータを作っている高橋秀俊先生、「コンピュータは人間と同じで将来結婚も可能であろう」という吉田夏彦先生など、多くの先生を囲んであらゆる面から、コンピュータをいじめぬいた。このたびのセミナーは各先生のお話を聞き、その場で希望のセクションにわかれるという今までとは違う方式がとられたため、数多くの先生のお話やいろんな人と討論できたけれども、いつも感じるような限られた時間に大きな問題をあつかうの十分納得のいくまでつきとめられたとはいえなかった。しかし単科大学に在るものにとつて、心理学、社会学、経済学、管理工学など多岐にわたる分野でのコンピュータの働きを知り、ひいては「機械と人間」という人間の存在の意味という一番重大な問題まで考えることができたのは今回のセミナーの大きな収穫であったと思ふ。

また内容が幅広いものであっただけに、少しずつではあったが、最大限と思われるくらい多くの先生方の実のあるウィットにっただお話を聞き、親しく接することができたということは、セミナー・ハウスはやはり現代の社会における一つのユニピアであるという感を強くした。

(津田塾大学四年)

第十六回 大学共同セミナー

■主題 音楽と社会

—— M・ウェーバー「音楽社会学」を

テキストとして ——

〔講義〕

第一部 社会科学と音楽——音楽の合理化とはどういうことか——
成蹊大学教授 安藤 英治氏

〔期日〕 第一回 昭和四三年六月七日

第二回 昭和四三年六月一四日

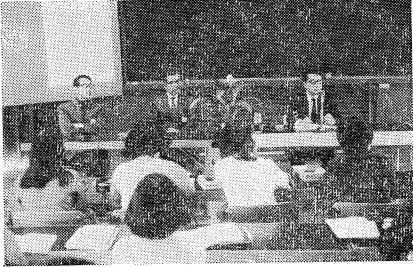
〔期日〕 第一回 昭和四三年六月二八日

第二回 昭和四三年七月五日

第三部 音組織からみた音楽史
桐朋学園大助教授 角食一朗氏

〔一〕未開民族の音楽
東京芸術大助教授 小泉文夫氏

〔二〕一八世紀の音楽と社会



最後に飾る全体討議：左から小泉、服部、角倉の三先生

東京芸術大助教授 服部幸三氏
〔期日〕 昭和四三年二月一六・一七日（一泊二日）

◇主題の主旨◇

このセミナーは社会科学と芸術という二つの異なった価値領域の交錯する世界を研究対象とした。残念ながらわが国においては、異なった学問領域の間の交流関係といものが十分に展開されていない。こういう状況に対して、異なる価値領域の間に少しでも「対話」の精神を呼び起したいというのがこの企画の目的である。従って、形式についても、一冊の書物を選び研究を何回か連続させるといふ新しいやり方をとった。今回は M・ウェーバーの『音楽社会学』をテキストとし、その翻訳解説に従事された三人の先生の外に音楽史と比較音楽学の専門家を加えた分業と協業によって、一つのまとまった全体像を描き出してみたい。

〔参加学生〕

二一大学九九名（うち女子三十六名）

〔出席者〕 第一部(1)七八、(2)七三、第二部(1)五六、(2)五七、第三部二四名

得がたい機会を喜ぶ

鳥井 照男

Sine ira et studio (怒りも興奮もなく) という言葉は、マックス・ウェーバーが、ビュロークラシー(官僚制)に奉った形容詞の言葉です。一体、社会科学における「価値からの解放」を唱えた彼が、なぜ、本来情緒的にかつ審美的な対象としての音楽について論じたのでしょうか？ 初めに持っていたであろう私の当然の疑問は、三部にわたった(半年を隔てての)各分野の専門の先生方の講義によって解決されたといえます。

彼が「経済と社会」の体系の中で追い続けてきた合理主義への関心を、たまたま彼がいだいた音楽における音組織の合理化に関係つけた点が「音楽社会学」の骨子です。即ち、古典的な音律が平均律に合理化される過程を知った彼は、芸術でさえもおどろくほどの合理的精神(Ratio)の上に立脚していることに気付く訳です。音組織ならば物理的に振動数とその比の関係で表わせますから、なるほど客観的なものですし、誰もがまさに怒りも興奮もなく容認せざるを得ないこととなります。ただし、音組織の合理化という現象が「音楽の進歩」であるといえるかどうかは、新たな疑問となりま

す。ギリシャ・ラテンの文学や日本の源氏物語がサルトルや川端康成の作品より劣っているなどはいえません。こうした彼の純技術的な把握の仕方による「音楽社会学」の中には、だから、ベートーベンやモーツァルトという単語は出てこないわけです。

ともあれ、こうしたユニークなウェーバーの著作は、大学セミナー・ハウスでなければ一寸取り上げることができないように私には思われます。音楽大学の講義や学術講演会で言わなければならない、一般の講演会、特に営利を目的とした所では難解な彼の「音楽社会学」をテーマにして一体「お客」がどの位入るでしょうか？

たとえ、これが、かの著名なマックス・ウェーバーの著作にしてもです。私も(参加した皆さんも)初めは、興味半分でセミナーに参加しましたが、最後には四分の一位の二五人に減ってしまいました。私は、飯田専務理事がいわれた「私達は学生相手に金儲けをしようとは思わない。それが本当に価値ありと認められ、必要ならば多少の損も辞さないでやる」という大学セミナー・ハウスの方針を感謝をもって思い出します。また、企画委員の松田先生はじめ五人の先生方、セミナー・ハウスの職員の方々に、得難いぜいたくな機会を与えて下さったことを感謝致します。

(東京都立大学経済学部)

学生生活の再現

桑野 啓始

先日は私たち社会人をお招きいただき、学生生活の良き味を味わせていただきありがとうございます。大学セミナー・ハウスの招待を受け、何はともかく姫路から駆けつけたのですが、何せ日頃からの不勉強の上に、コンピュターの実際も心得ず、まことに恥ずかしい次第でした。しかし学生諸君の真剣な態度には大いに反省させられるところも多く、社会人としてこれからも「学生らしい気持」を忘れないよう努めていかねば、と思いました。

八王子の山の上、清い空気が自然の林の中で勉強することができたのは、大変有意義であったと感謝しております。

コンピュターと人間というテーマ自体は、学生のとり上げる問題としては若干、問題ありとの印象を受けましたが、それを契機としての話し合いは、やはり現在の社会に不足している何かを与えるように思われました。

(富士製鉄広畑製鉄所教育部)



☆☆☆☆☆☆

クリスマス・パーティーで

茅誠司館長の古稀を祝う

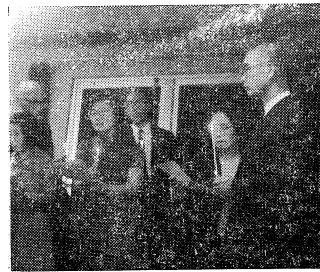
◇クリスマス音楽会◇

一六・一七日と第一六回共同セミナー「音楽と社会」の第三部音楽組織からみた音楽史のセミナーが開催されていたので、第二日目の午後三時三十分から六時までを東京芸大服部幸三先生の解説と指導をうけて、各国のクリスマス音楽をステレオで大きくクリスマス音楽の集いとした。共同セミナーの参加学生に加えて、クリスマスのために来た学生も加って大変よい会であった。茅館長ご夫妻も山内恭彦先生も出席された。

いつものメサイヤ音楽と違って、寧ろ各国の民謡が紹介されたので、クリスマス音楽が民間になじんでいる外国の状態を知ることができた。



ケーキにナイフを入れる茅先生ご夫妻



キャンドル・サービスもおどそかに

◇クリスマス・パーティー◇

茅誠司館長古稀の祝い◇

本館食堂は大きなクリスマス・ケーキを中心にして、テーブルが放射線に配列され、クリスマス・デナーのメニューで食慾をそそる。今夕の主賓館長茅誠司先生ご夫妻のテーブルには、親しい友人の山内恭彦博士、セミナー・ハウスの常連、東京女子大白井常、立教大学久保田キヌ子両教授、上智大学の鈴木皇教授、そして音楽家服部幸三先生達ならぶ。飯田能子の司会役で前半を進行。先ず山内先生が茅先生の古稀を祝して乾杯に立ち全員これに和しておめでとう。晚餐が楽しく終って、全員注目の中に茅先生ご夫妻が仲よくならんでクリスマス・ケーキにナイフを入れられ、併せてパースデー・ケーキの感じを出して下さい

☆☆☆☆☆☆

た。茅先生、なんと若い七十歳である。古稀といわれるのをおきらいになる理由であらう。

後半は学生側の浅岡・三根両嬢が司会役となって進行。殊に順天堂大学の体育レクリエーションの井上助手がお手伝いに来て下さったので、面白いプログラムが続出した。最初は茅館長のお話があり、クリスマスのお話があり、消灯の中に、真理の鐘が鳴らされると共にキャンドル・サービスに茅先生の点火が行われ、清よしこの夜となつて来た。その中で白井常先生がクリスマス・メッセージを感じ概深く述べらる。

プレゼント交換には、それぞれのプレゼントを持ち寄って、これを分け合い、それを披露し、セミナー・ハウスからは、茅先生ご夫妻へご誕生日のお祝い品をおくるときは、馳せ参じて下さる山内恭彦、鈴木皇、久保田キヌ子三先生にはご苦勞様賞を贈呈する。

ゲームが次々に行なわれ、笑いが続く。その間にユーラが出る、ミカンがくばられ、接待も忙しい。一〇時に名残おしくも閉会、帰途につく者あり、一夜を語りあかすため泊りのグループもあった。折柄セミナーに来ていた原子動力研究会の都立大伊丹教授など多数の学者連もこのパーティーに参加され、歓を共にして下さったのはセミナー・ハウスならではの交わりである。

奇 贈 図 書

(昭和43年7月~44年1月)

- 「工学院大学研究報告」第二四・二五号
- 「第一一回工学院大学研究発表講演会講演要旨」
- 「研究論叢」第七号
- 「国際問題」No.九九、一〇六
- 「大君の使節」 芳賀 徹殿
- 「サルトルと構造主義」 竹内書店殿
- 「心の風物誌」 小島憲正殿
- 「天才」
- 「若き人々に」
- 「人間形成と実存哲学」
- 「歴史的世界と人間存在」 藤田健治殿
- 「シェイクスピアへの道」 児玉久雄殿
- 「人間と国家」 久保正幡殿
- 「東京女子大学五十年史」 東京女子大学殿
- 「ブリタニカ」 北野美枝子殿
- 「使者たち」
- 「文体論入門」 A・H・マーカート殿
- 「学生運動」 鈴木博雄殿
- 「日本の庭園」 吉永義信殿
- 「みつばさのかげに」 西村秀夫殿
- 「日本女子大学教養特別講義」第一・統第一・第二集 日本女子大学殿
- 「歴史の研究」第七・第八巻 佐藤壹一郎殿
- 「アメリカの教育」
- 「日本の歴史」全一二巻
- 「西洋中世都市とギルドの研究」
- 「大学の未来像」
- 「回想笠信太郎」 増田四郎殿
- 「理科年表」 海老沢克之殿
- 「西ドイツの精神構造」 宮田光雄殿
- 「孤島」
- 「サルトルと構造主義」 竹内書店殿
- 「アジアとの対話」 板垣与一殿
- 「資金計画のたて方」 染谷恭次郎殿
- 「昭和研究会」
- 「社会科学」第一四号 芳山邦弘殿
- 「機械工学実験法」 小茂鳥和生殿
- 「工業熱力学」 秋田 稔殿
- 「聖書の思想」 林雄二郎殿
- 「十年後の西ドイツ」 井門富二夫殿
- 「大学の未来像」 井門富二夫殿
- 「プロテスタントの歴史」 渡辺信夫殿
- 「中世英国世俗領の研究」 鷗川 馨殿
- 「青年と文学」 小塩 節殿
- 「またあいましよう」 神戸照子殿
- 「動乱の昭和史」 原 敬吾殿
- 「戦後の精神史」 小川圭治殿
- 「ローマ書講解」 大塚久雄殿
- 「大塚久雄著作集」第一巻

